記念誌 「相中相高百年史」 ”思い出の記 ” より

カ ー キ 色 の 筍 時 代

中41回卒　山本　光夫 (※1)

相馬中学校の制服が従来の黒と霜降りからカーキ色に変わったのは昭和十年の入学生からだった。登下校時には制服制帽に背嚢（ランドセル）、編上靴（ゴム製もあった）に巻脚絆（ゲートル）の着用が強制された。私が入学したのは翌十一年で、このゲートル巻きには悩まされた。足が短いので、筍の様になり、すぐ解けてしまうのである。新しいゲートルを半分に切ることで悩みを解決したのは三ヶ月後のことであった。外で先生に遭った時には気を付けの姿勢で、挙手の礼をしなければならなかった。又、職員室の入口には足の型が描いてあって、生徒はそこで、直立不動の姿勢で、大声で組、氏名と用のある先生の名を叫ばなければならなかった。先生との会話も「……であります。」調の軍隊言葉で無ければならなかった。私は三年時に結核の為二年間の休学を余儀無くされた。

回復して復学した時、放縦な療養生活から増々、軍隊色を強めた学園生活に適応するのは仲々容易で無かった。特に軍事教練の時間は私にとって最大の苦痛だった。しかし、配属将校の内申が悪いと、上級学校に進学も出来ないし、軍隊に行っても幹部になれないとあって、厭でもサボるわけにはいかなかった。復学の当初は安静を要するとのことで、見学を許されたが、軍事教官は見学者に酷しく、いつも標的等を持たされた。教練の場は体育館、校庭、長友グランド、野球場、桧の沢演習場或いは西山堤の実弾射撃場と変ったが、仮想敵として、寒風の中、長時間、同じ姿勢を保たせられる苦しさは堪え難いものだった。漸く隊列に復帰する様になっても、私には銃が重かった。

……　　中略　　……

四年時には修学旅行があった。関西は許されず、日光、水戸へ出かけてのささやかな旅だったが、結構楽しい思い出もあった。中禅寺湖畔の渚ではパンツを隠されたH君がフロから出て来た所を教官に咎められて、廊下を裸で逃げ廻る風景もあったし、水戸では時間外に屋根伝いに脱出したグループが市内を裸足で徘徊して、警察の補導を受けた一幕もあった。遠足は銃を担っての行軍で、長距離を水を呑まずに歩く訓練等が加味されて居た。全校で鹿狼山に登った時のこと、校長以下全職員生徒が山上から見下ろす中を、二人だけで銃を水平に担いで、悠々と帰って行く生徒が居た。M君とW君であった。「途中で厭になったので。」と云うことだったが、我々にはその度胸の良さに舌を捲いた。後で始末書を取られた時、W君は反省文に、「私儀生意気のため…」と書いて居た。「生意気だから…」と云のはこの時の校長の口癖だった。

翌年には若松連隊の演習場だった磐梯山麓の翁島で集団宿泊訓練が行われた。準備の段階で携帯品の説明があった時、教官がチリ紙の代用品はと問いかけた。「蕗の葉ッパ」と答えた生徒が居た。爆笑の渦となった。旗竿高地まで突撃する激しい訓練が繰り返されて、小便が茶色になった。廠舎における生活も分刻みで、便所の順を争う様な酷しいスケジュールだった。　……　略　……　帰りの車中で、私は始めて、銃を支えにして立ったまま眠る体験をした。

……　　中略　　……

終戦後も夢に見るほど、中学校の軍事教育は辛かった。しかし、非力で病み上がりの私が何とか無事にこの試練に堪えて卒業出来たのは、先生方の温情ある御指導に由ることは勿論だが、倒れそうになった時、銃を持ってくれたり乏しい水を別けてくれた友、ことごとにかばってくれた友人達のお陰でもある。卒業以来五十余年、往時、茫々として夢の如く、年月も季節も定かには記憶しないが、その頃の友人の一人一人の顔は今でもありありと目に浮かんで来る。

古人の詩に曰く　『亡くなった友、去った友、いろんな友があったけど、みんな、みんな、今は無い、ああ懐かしい、古い顔』

（※1）昭和18（1943）年卒　中村出身

（選択転記　村山）